



山陽小野田市

ふるさと文化遺産

山陽小野田市ふるさと文化遺産

コーストウォーク

～海岸線から見る情景～



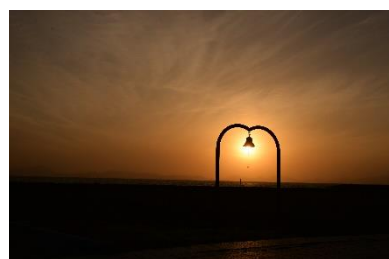
厚狭川河口



平松1号古墳



後潟開作



焼野海岸

令和7年5月

山陽小野田市教育委員会

コーストウォーク ～海岸線から見る情景～

山陽小野田市は山口県の南西部に位置し、市域の全ての海岸線は瀬戸内海に面しており、市内中央部には厚狭川、有帆川が流れています。その海岸沿いや河川沿いには、太古からの自然や、古墳時代から現代に至る市の歴史と風土を知るうえで貴重な文化財が数多く残されています。

序章 海岸線から見る山陽小野田

昔の山陽小野田市の海岸線には、どのような風景が広がっていたのでしょうか。

山陽小野田市では、平成30年（2018）から山陽小野田観光協会主催の海岸線を約30km歩く「スマイルコースト・ウォーク」というウォークイベントがあり、令和6年（2024）は7回目が開催されました。

そのコースに沿って海岸線を歩く気分で各地区の昔と今を見ていきましょう！



【海岸線にある指定文化財】

- ① 糸根の松原（市指定文化財）
- ② 平松1号古墳（市指定文化財）
- ③ 周防灘干拓遺跡高泊開作浜五挺唐樋（国指定史跡）
- ④ 旧小野田セメント製造株式会社堅窯（国重要文化財）
- ⑤ 塩浜石炭焚滓堆積地（市指定文化財）
- ⑥ 竜王山のハマセンダン（県指定文化財）
- ⑦ 旧本山炭鉦斜坑坑口（市指定文化財）

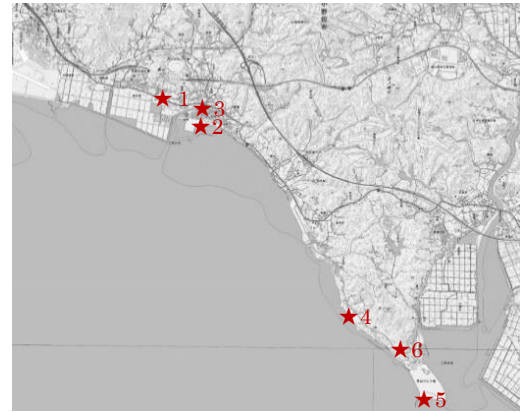
※コースの詳細はP23～P26の地図に記載

章	色	地区	ページ	地図ページ
第1章	■	埴生・津布田	P2～P5	P23
第2章	■	厚狭川河口	P6～P10	P24
第3章	■	有帆川河口	P11、P12	P24
第4章	■	小野田	P13～P16	P25
第5章	■	木戸刈屋から本山海岸	P17～P20	P26

第1章 埴生・津布田

埴生地区や津布田地区は、山陽小野田市の中でも古い歴史をもつ地区の一つです。

この地区の海岸線からは、対岸の九州や関門海峡に架かる関門橋を眺めることができ、見晴らしの良い景色が続いています。また、津布田海岸付近では消波ブロックが横一列に並んでいるなど、海岸線ならではの風景を見ることができます。



写真位置図

国土地理院地図

今見ることのできる景色は、この地区がたどってきた歴史と結びつきます。

1. 埴生のシンボル「糸根の松原」

下関市との市境から海岸線沿いの堤防を少し歩くと、北側奥に「糸根の松原」があります。この付近の風景は、干拓や土地利用に伴う開発によって一変しましたが、広い砂丘の上にクロマツが群生し美しい景観を作っていた松原の一部を、現在も見ることができます。

埴生地区は、古代には駅家がおかれ、昔から交通の要衝でした。中世になると、さまざまな人が往来したようです。旅をした人々は埴生の景色をどのように見ていたのでしょうか。当時の紀行文には次のようにあります。

『道行きぶり』今川貞世（14世紀後半）

（前略）それよりは山に分入て海のへたにうち出侍ぬ、こゝを羽ふとかや申なり、南はうら浪たかく立て、雲ふかき絶間に山ちかくみえたり、豊前国なるべし、北のやまは松しげりて、其前に社あり、八幡とぞ申なる、御垣の前に西東へつながれてしほもかよひ侍りけり、橋わたして大なる鳥居立たり、松ばらむらだちたり、住吉の御前のはまおぼえたり（後略）

「埴生の浦に出る。南方は浦浪の高く立ち騒ぐ彼方に豊前の山々を眺め、北方は松の木立の茂る山の前に八幡社（埴生八幡）があり、玉垣の前の東西に汐が通う小川には、橋が架かって大きな鳥居が建っている。松原も群がり立ちて（埴生糸根の浜が）摂津の住吉社の前の浜のようだ。」といった意味でしょう。



糸根の松原（国道190号沿いから）
令和6年（2024）撮影 ★1

「糸根の松原」がある糸根公園には、昭和40年（1965）8月に誘致された観光施設「山陽パーク」がありました。先にプールの使用が始まり、その後、観覧車、ジェットコースター、プラネタリウムなどの遊戯設備が整えられていき、当時は多くの人でにぎわっていました。昭和40年代中頃から入場者も次第に減少し、昭和47年（1972）頃から遊具が随時撤去され、最後まで稼働していた天文館（プラネタリウム）は令和5年（2023）3月に閉館しました。プラネタリウムの投影機MS-10は、現存するコニカミノルタ製最古のプラネタリウム1号機であり、コニカミノルタプラネタリウム株式会社の直営館プラネタリアTOKYOにて静態展示されています。



山陽パーク（現糸根公園） 昭和42年（1967）
（シティセールス課提供）★1



天文館で使われていたミノルタプラネタリウムMS-10
令和3年（2021）撮影

コラム① 糸根の松原の名前の由来はあの歌人に関係あり！？

昔、平安時代の歌人和泉式部が糸根の松原で赤子を安産したと言い伝えられています。その和泉式部の伝説にちなみ「赤子寝の濱」、「愛寝の濱」と呼ばれていましたが、「愛寝」に「糸根」の字が当てられ現在の「糸根の松原」になったそうです。



糸根の松原 昭和26年（1951）
（厚狭図書館蔵）★1

す。埴生地区には和泉式部の墓と言
い伝えられている場所も、残されて
います。（23 ページMAP参照）

また、この「糸根の松原」には、
江戸時代の『地下上申絵図』にも
記載がある「赤兼山」という山があ
ります。日本で2番目に低い山だと
か！？

2. 埴生地区の漁業と海運^{ぎょぎょう かいうん}

埴生地区では、江戸時代にはすでに投網漁^{とあみりょう}、明治初期には手繰網^{てぐりあみ}を使ってのイカ漁や投網による鰯・ボラ漁が行われていました。昭和初期には漁業組合が組織^{そしき}されており、漁種^{ぎょしゅ}や漁獲量^{ぎょかくりょう}も多く、漁業が盛ん^{さか}に行われていました。昭和7年（1932）に、糸根海岸に47,000坪の養殖場^{つば ようしょくじょう}が開設^{かいせつ}され、車エビ、カニ、貝類の養殖がされていました。



車エビの養殖場 昭和26年（1951）
（厚狭図書館蔵）

また、埴生浦は長府^{ちやうふ}や赤間関^{あかまがせき}、豊前へ渡海^{とかい}もできる港でもありました。中世の紀行文や江戸時代の古文書^{こもんじょ}からも、人々が埴生から船に乗って移動^{いどう}する様子が読み取れます。

明治には、笠井順八^{かさいじゅんぱち}によって小野田～埴生～赤間関の航路^{かうろ}が開かれ、小野田丸^{まる}と名付けられた船が往来し、交通手段^{しゆだん}として厚狭^{あさ}の人も利用していた記録があります。

3. 祇園まつりと埴生芝居^{ぎおん しばい}

埴生祇園まつりは、毎年7月下旬^{げじゅん}に行われ、神輿^{みこし}が糸根神社周辺^{ちいさ}地域や埴生漁港を2日間かけて巡行^{じゅんこう}します。以前は7月の大潮^{おおしお}の日に4日間かけて行っていました。最終日に行われる御神幸^{ごじんこう}では、神輿を乗せた御座船^{ござふね}で海をまわる船渡御^{ふなとぎよ}があります。

埴生祇園まつりの際に上演^{さい じやうえん}される埴生芝居は、江戸時代に埴生の民家^{みんか}500軒のうち残ったのは3軒だけという大火^{たいか}など、多くの火事があり、後に難^{のちなん}をおそれた村民^{そんみん}が総鎮守^{そうちんじゅ}埴生祇園社^{ぎおんしゃ}（現糸根神社）に芝居^{しばい}を奉納^{ほうのう}したことが起源^{きげん}だと伝えられています。



船渡御 昭和50年代（個人提供）★2



埴生芝居 令和6年（2024）撮影 ★3

4. 素晴らしい眺望 津布田地区

津布田海岸からは関門海峡や対岸の九州が見渡せ、
また晴れた日には大分県の山々まで良く見えます。
この海岸線に、6世紀後半から7世紀初頭に築造されたと考えられる円墳の「平松1号古墳」(表紙写真)があります。



平松1号古墳付近からの眺め
令和6年(2024)撮影 ★4

この古墳は、地域の豪族の墓として支配者の権威を象徴するため、瀬戸内海を見下ろし遠く九州を見ることができるこの景勝地に造られたのでしょう。

津布田地区にある火ノ山には、眺望の良さからか、烽(狼煙場)があったと考えられ、下関の火の山から受け取り、小野田の竜王山(番屋ヶ辻)に伝えたとされています。

この烽は古代の烽燧制の起源とされ、狼煙によって急を伝える仕組みで、火が飛ぶような状態から「とぶひ」と呼ばれました。

現在、若山ゴルフクラブ梶コースがある場所には、昭和28年(1953)8月に沖合を埋め立てて操業を開始した「若山炭鉱梶鉱業所」という海底炭鉱がありました。炭鉱閉山後、埋立地を整備し、会社の同好会のためにゴルフ場が造られたのが始まりだそうです。近くの丘から海を眺めると、ゴルフ場が一望でき、炭鉱当時の写真と見比べてみるとその情景を感じることができます。

「スマイルコースト・ウォーク」のコースの中でもおすすめの場所の一つです。



若山炭鉱梶鉱業所 昭和30年代
(歴史民俗資料館蔵) ★5



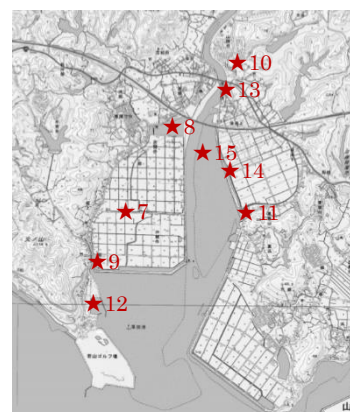
梶タ日スポット(夕陽ヶ丘)から見た若山ゴルフクラブ梶コースと竜王山 令和6年(2024)撮影★6

第2章 厚狭川河口

厚狭川は、美祢市於福の大々峠を水源とする約44kmの二級河川で、吉部田沖から周防灘へと流れていきます。

厚狭川河口付近はほとんどが江戸時代以降に造成された開作地で、昔と変わらない開作地の風景が広がっています。

また、厚狭川橋からは厚狭川河口の広い干潟が見え、堤防からは川の中洲や水田に集う野鳥の様子を観察できます。



写真位置図

国土地理院地図



- ① 沖開作 (安政4年 (1857))
 - ② 古開作 (弘化4年 (1847))
 - ③ 後潟開作 (宝暦2年 (1752))
 - ④ 黒崎 (黒葉山) 開作 (明治5年 (1872))
 - ⑤ 南高泊干拓 (昭和26年 (1951))
- ※年号は汐止めまたは工事着手の年
- ※「スマイルコースト・ウォーク」の進行順に沿って付番
- ※①②を総称「梶浦開作」という。

1. 河口の人々の暮らし

(1) 開作地の風景と歴史

厚狭川河口は、江戸時代から明治時代にかけての開作や昭和の干拓により造成された土地で、夏は稲の青々とした鮮やかな田園が広がり、秋には黄金色の稲穂が揺れる情緒あふれる開作地らしい風景が広がっています。



夏の田園風景 沖開作 令和6年(2024)8月上旬撮影 ★7



秋の田園風景 沖開作 令和6年(2024)9月下旬撮影 ★7

秋の田園風景ドローン映像



厚狭川河口付近には開作に関連する神社や記念碑、遺構があり、それらは地域の人々の生活に深く関わっています。

厚陽小中学校前に広がる古開作溜池は、梶浦開作地の灌漑用水池として造られました。溜池の中島にある巖島神社の御神体は、梶浦開作の鋤初めのとき三鋤目に掘ったかき殻が付いた油石であると伝えられています。現在の場所には明治17年(1884)に建立されました。開作地の安全を祈る鎮守です。



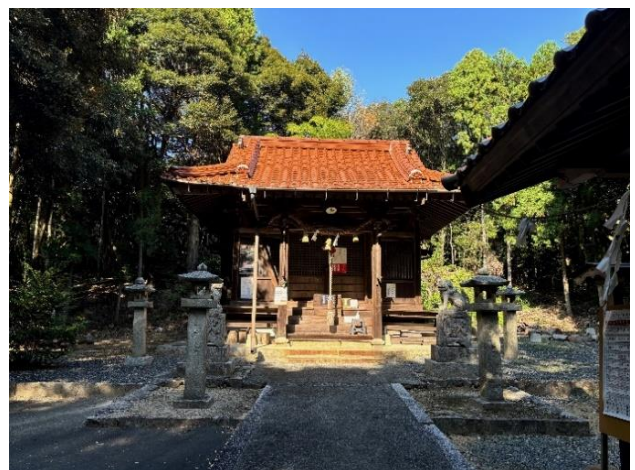
古開作溜池と巖島神社 令和7年(2025)撮影 ★8

沖開作の鎮守は、始め古開作の巖島神社でしたが、のちに分離して慶応2年(1866)6月17日に安芸の宮島から新しく神様を迎え祀り、龍神社の小祠を建てました。社地を転々とし、現在は沖開作西南隅に鎮座しています。側には、明治43年(1910)5月25日に建てられた、厚狭郡沖開作干拓記念碑があります。



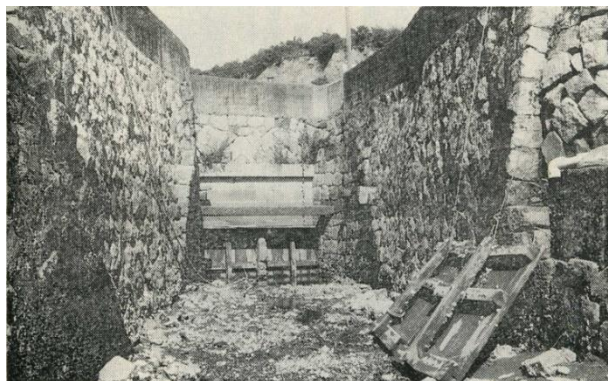
龍神社と厚狭郡沖開作干拓記念碑
令和7年(2025)撮影 ★9

綿津見神社は、後潟開作の鎮守で、宝暦2年(1752)に厚狭川にかかる厚狭川橋にほど近い高須の川土手に創建されましたが、厚狭川の洪水に悩まされ、安永6年(1777)に現在の場所に遷りました。八大竜王社と称していましたが、明治4年(1871)に現社名に改称しました。土手まつり(10ページ)の神事は、この神社で行われています。



綿津見神社 令和6年(2024)撮影 ★10

後潟開作二挺唐樋は、後潟開作の堤防の最東端にあった排水用樋門で、2枚の招き戸を備えていました。海側の樋門は、平成20年（2008）に高潮対策のため沖合に護岸が作られた際に埋没保存され、現在は遊水地側の樋門跡のみ見ることができます。



埋没保存された二挺唐樋の海側の樋門 年未詳
（『小野田市史 民俗と文化財』より転載） ★11



現在も残る二挺唐樋の遊水地側の樋門跡
平成20年（2008）★11

（2）漁業を営む人々

梶浦は江戸時代、厚狭毛利氏の給領地に属していました。廻船で働く人もいたようで、梶浦に天神丸という船があり、米や荷物を運び、萩と行き来をしたという記録があります。漁業では、手繰網や長の緒を使用した漁を行っていました。明治には帆引網での漁も始まり、厚狭川川下では明治30年（1897）頃から海苔の養殖が行われるようになりました。

後潟・高泊村では、江戸時代は農業が主体でしたが、海岸干潟で貝類の採集や干潟漁・網漁を営むものもありました。明治には海苔の養殖が始まり、大正2年（1913）末の記録によると、多くは農業の合間に漁業を行っていたようで、農閑期に行われる海苔養殖は格好の副業だったようです。



梶浦全景 昭和22年（1947）
（厚狭図書館蔵）★12



高浜の海苔生産風景 昭和13年（1938）
（歴史民俗資料館蔵）

(3) 生活に欠かせなかった渡し船

昭和2年(1927)に厚狭川橋が開通する以前は、厚狭川の右岸と左岸の行き来は渡し船を利用しており、現在も「渡場」という地名が残されています。大正から昭和にかけては、通勤者や通学者などで、渡し船の利用客は1日に400人くらいあったと言われています。

右岸側の渡しは吉部田・渡場の共同経営で、船も岸辺の番小屋も共有でした。左岸側の船は、営んでいた庄屋の屋号から「大黒屋渡し」と呼ばれていました。双方が2日ずつの交代制をとり、大雨の日も雪の日も年中無休で運営されていました。

左岸にある大黒屋渡しの名残から、当時の情景が目に見えます。



厚狭川左岸の渡場跡 令和7年(2025)撮影 ★13

コラム② 梶浦船頭小三郎 ～毛利勅子の送迎役～

厚狭川河口にある梶浦は、厚狭毛利家にとっても重要な場所だったようで、防衛の拠点、海上交通の拠点と位置づけられていたようです。その土地柄、梶浦の人々は、漁と船頭の仕事で生計を立てていた人が多かったと推察されます。

梶浦の住人に小三郎という人物がいました。小三郎は、慶応元年(1865)1月に、厚狭毛利家の正室勅子が徳山へ行った際に船頭として働きました。その働きぶりは大変丁寧だったので、仕事を終えると「金二百疋」が与えられました。

しかし、勅子が徳山から厚狭へ戻ってくる際に問題が occurred。厚狭毛利家より梶浦から船頭2人を徳山へ向かうように命じられますが、漁を行っていることを理由に誰も行くことができませんでした。そのような事情の中、徳山へ向かったのが小三郎でした。当時の記録をみると、自らの意思で徳山へ向かったと考えられます。

3月10日、3名の厚狭毛利家家臣と「御進物」をのせ梶浦を出発。3月27日に徳山で勅子をのせ、4月2日、無事に勅子を下津まで送ることができました。その功績により5月、「一代苗字※」の使用を許されました。船頭小三郎のように、古記録には少ししか登場しない人物も忘れてはならない歴史上の人物なのです。

※一代苗字…その人に限り、公に苗字を名乗ることを許されること。

2. 土手まつり

毎年8月12日に、厚狭川の川上、川下の二手に分かれて後潟開作の土手の枯れ草を焼く「土手まつり」が、令和元年（2019）まで行われていました。堤防の決壊を起こす悪霊を払ったり、稲につく害虫を火におびき寄せて焼いたり、追い払って駆除したりする目的で始まったと伝えられています。暗闇に赤々と浮かび上がる姿と白くたなびく煙の一文字焼きの荘厳な情景は、地区の住民にとって夏の風物詩でもありました。

令和2年（2020）以降は、行事の形態を変え、土手の草の一部を事前に刈り取り、綿津見神社の神事の際にお焚き上げを行って、地区の無事と五穀豊穰を祈願しているそうです。



土手まつり 令和元年（2019）撮影（個人提供）★14

3. 鳥が集う場

厚狭川河口には干潟が広がり、河口流域の水田面積が広いことなどから、冬はクロツラヘラサギやガン、カモ、春や秋はシギ、チドリの飛来地として、県下有数の場所となっています。

干潟や水田、古開作溜池などには年間を通じて様々な野鳥が訪れ、バードウォッチングに最適です。これも、厚狭川河口に開作が行われ、水田が広がったこの地区ならではの風景です。



古開作溜池に飛来したクロツラヘラサギ
令和元年（2019）撮影（個人提供）★8



厚狭川河口中州にたたずむチュウシャクシギとウミネコ
平成28年（2016）撮影（個人提供）★15

第3章 有帆川河口

有帆川は、美祢市伊佐桜山を源流とする全長31.8kmの二級河川です。

有帆川河口には有帆川大橋が架かり、左岸には日産化学株式会社小野田工場が、右岸には高泊開作築成時に造られた一直線の土手（横土手）や縄地ヶ鼻があり、まさに小野田地区の歴史が一望できます。



写真位置図

国土地理院地図

1. 太古の大地が残る地 縄地

縄地と書いて「のうじ」とも呼ばれます。縄地ヶ鼻の海岸は、チャート（海底でプランクトンなどの放散虫の遺骸がたまって固まったもの）や泥岩と砂岩の互層といった様々な種類の地層や堆積岩を一度に見ることができます。これは海洋プレートの運動により形成されたもので、2億5千万年以上も前の壮大な日本列島形成の歴史の一部を感じられます。



縄地ヶ鼻 令和7年（2025）撮影 ★16

2. 江戸と明治が見える場所

有帆川河口にある有帆川大橋は、平成26年（2014）に開通した長さ478mの橋で、縄地ヶ鼻や有帆川河口を眺めることができます。

有帆川の右岸に広がる土地は寛文8年（1668）に工事が始まった高泊開作です。ここは干満差が激しく埋立に適していることから、開作の地に選ばれました。

有帆川の左岸には、日産化学株式会社小野田工場があります。この工場は笠井順八などが誘致に尽力し、明治24年（1891）に日本舎密製造会社小野田工場として操業したのが始まりです。その後、小野田地区は「近代産業のまち」に変化していきます。



上空から見た有帆川河口 昭和 14 年（1939）、15 年頃
（歴史民俗資料館蔵）★17



新生町上空からみた有帆川河口 昭和 39 年（1964）
（歴史民俗資料館蔵）★18

明治後半から昭和 30 年代には^{だん}旦地区などで^{りゅうさんびん}硫酸瓶が生産され、有帆川に無数の船が^{なら}並び硫酸瓶を積み出す風景がありました。^{げんざい}現在でも有帆川^ぞ沿いに^{ふなつきばあと}船着場跡を見ることができます。

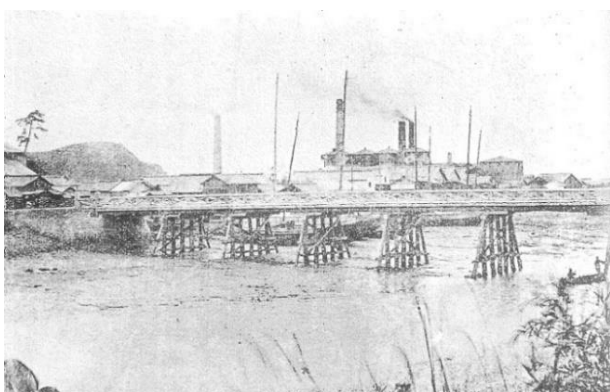


有帆川河口の風景 昭和 10 年（1935）頃
（歴史民俗資料館蔵）★19



横土手船着場跡 令和 6 年（2024）撮影 ★20

左下の写真は、明治 42 年（1909）3 月 21 日^{らくせい}落成直後の小野田橋（現在の第二小野田橋）です。鉄道の開通を^{けいき}契機に小野田駅と^{すえむら}須恵村とを結ぶ道路が^{しんせつ}新設され、橋が^{かせつ}架設されました。これにより有帆川を^{さかのぼ}遡^{おうらい}っていた船は往来できなくなり、河川交通の^{すがた}姿が変わっていきましました。右下は小野田橋付近の写真です。



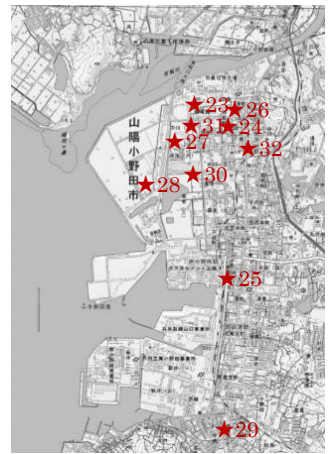
小野田橋（現在の第二小野田橋） 明治 42 年（1909）
（『小野田の銀座 柳町と有帆川』より転載）★21



小野田橋付近 昭和 25 年（1950）
（歴史民俗資料館蔵）★22

第4章 おのだ 小野田

現在の海岸線は、江戸時代以降に開作や干拓によってできたもので、それ以前は一面の海でした。小野田地区は、明治以降セメント会社を始め多くの工場が建てられ、市街地化が進んだ地区でもあります。現在、この地には商業施設や住宅が密集し、多くの文化・スポーツ施設が立ち並んでいます。



写真位置図 国土地理院地図

1. 市街地化への歴史

(1) 小野田地区の開作・干拓・埋立地

開作や干拓・埋立が行われる前の小野田地区はどのような景色だったのでしょうか。江戸時代の史料には次のようにあります。

『防長風土注進案』

「西は城戸・刈屋の両浦、西の浜の塩竈、野来見・小野田の渚涇に往来仕候、此間都て浅海、大汐の節ハ凡地方よりも式拾丁も干潟に相成、高泊御開作より縄地の鼻、吉田御宰判梶浦宮崎の岬、清末長府壇の浦干珠満珠の二島まで一面に見渡候事」

「刈屋浦下より北入海小野田迄凡式拾丁程の間遠干潟、干詰地方より凡三拾丁程、大汐満詰式尺位、程沖中にて深サ壺丈位」

この内容からも、小野田の遠浅の地形と、その海岸の渚を人々が往来していた様子を読み取ることができます。

小野田地区は、江戸時代以降、南から北の方へ順に土地が広がっていきました。東沖干拓は災害に備え、高潮を防ぐ意味もありました。

①小野田新開作（明治4年（1871））

②東沖干拓（昭和34年（1959））

③小野田中開作（慶応3年（1867））

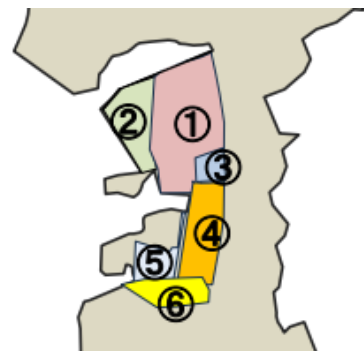
④小野田古開作（安政2年（1855））

⑤新沖埋立地（昭和4年（1929））

⑥西の浜開作（延享元年（1744））

※年号は汐止めまたは工事着手の年

※「スマイルコースト・ウォーク」の進行順に沿って付番



小野田地区開作・干拓・埋立地 地図

(2) 市街地化へ

明治14年(1881)に笠井順八が、小野田地区の開作地に日本初の民間セメント製造会社、通称「小野田セメント」(現太平洋マテリアル株式会社)を設立し、小野田のまちが発展していきました。

まちの発展については、山陽小野田市ふるさと文化遺産『小野田セメントと笠井家』や『窯のまち』に詳しく掲載しています。

また、海岸線付近にある東沖緑地や新沖緑地は、工業地域と住居地域との間に設けられた緩衝緑地です。これは、視覚遮断、騒音防止などの効果や、市民のレクリエーション活動の場、都市景観の向上、都市防災などの効果をねらい建てられました。東沖緑地の付近には商業施設のほかに、野球場やサッカー場などのスポーツ施設があります。



野球場付近 昭和38年(1963)
(歴史民俗資料館データ管理) ★23



小野田市街地の様子 令和6年(2024)撮影 ★24

セメント町から西の浜に向かう直線の道は、以前は小野田古開作の西沖堤防で「八丁土手」と呼ばれていました。開作地の水をいったん溜めていた遊水池は、ほとんどが埋め立てられ北竜王町に一部を残し、住宅地となっています。地形にその名残を感じられます。



小野田古開作の堤防跡「八丁土手」 現在の港町付近
年未詳(社会教育課管理) ★25

※写真奥に竜王山が見えます。

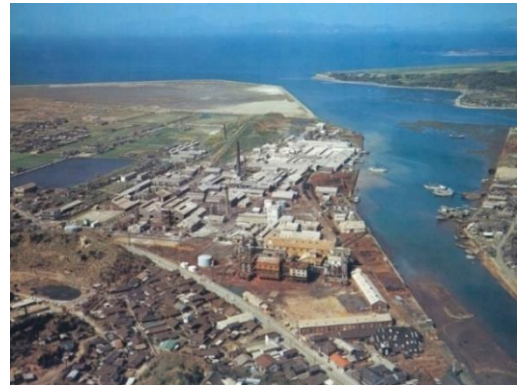


小野田古開作の堤防跡「八丁土手」 現在の港町付近
令和7年(2025)撮影 ★25

2. 産業と共に変わりゆく風景

(1) 日産ダヴ

現在の中央図書館や歴史民俗資料館、市民館がある場所には、通称「日産ダヴ」と呼ばれる貯水池がありました。(写真左側の長方形)これは、日産化学株式会社小野田工場により大正12年(1923)頃に、工業用水として利用するために造られたものです。写真上側には、昭和34年(1959)に造成された東沖干拓や縄地など当時の有帆川河口の様子が伺えます。



日産ダヴ 昭和36年(1961)
《『日産八十年史』より転載》★26

(2) サッカー場とサッカー交流公園

市サッカー場は昭和38年(1963)に開催された第18回国民体育大会(山口国体)を機に小野田新開作地に建設されました。その後、昭和57年(1982)から高校サッカーフェスティバルが始まり、サッカーが広く市民に親しまれています。



山陽小野田市サッカー場 昭和38年(1963)
(歴史民俗資料館データ管理)★27

東沖干拓は農業用地、工業用地と時代に合わせ役割を変え、平成18年(2006)、その干拓地の一部に山口県がサッカー交流公園を開設しました。令和3年(2021)に市営となり、現在プロサッカーチームである「レノファ山口FC」の練習拠点にもなっており、市内外から多くの人が訪れています。



山陽小野田市立サッカー交流公園
(愛称 おのサンサッカーパーク)
令和7年(2025)撮影 ★28

(3) 塩浜石炭焚滓堆積地

この史跡は、江戸時代に西の浜周辺の塩浜で製塩燃料として使われた石炭の焚き滓が堆積したものの一部です。赤崎神社境内の木戸・刈屋口参道に面し、最高約2.4m堆積しており広さ約103㎡あります。塩の製造や石炭の歴史を知る貴重な文化財です。



塩浜石炭焚滓堆積地 令和7年(2025)撮影
★29

コラム③ 昭和 17 年 8 月 27 日～未曾有の大風水害～

毎年どこかで災害のニュースを目にします。過去を振り返ると、山陽小野田市域で被害の大きかった災害に、昭和 17 年（1942）の台風 16 号（周防灘台風）による風水害があります。8 月 27 日の夜に山口県の西側を通過した台風は、県内各地に高潮、暴風、洪水による被害をもたらしました。当時の生田村、厚狭町の海岸沿いでも被害があり、埴生浦の住民は「家財、漁船、漁網の一切を失った」といい、梶浦開作地では堤防が決壊し、田に海水が流れ込み、稲はほとんど流失したそうです。

山口県内でこの台風の被害が特に大きかった自治体の一つが小野田市です。周防灘に面する堤防が決壊し、市街地が一面海と化しました。その間 30 分くらいの時間だったそうです。小野田市の被害は、死者 141 名、家屋倒壊 195 軒、流失 96 軒、床上浸水 8,218 軒という記録があり、市在住の人々のほとんどが罹災したとされます。小野田市の罹災 30 日後も建物の一階が完全に水に浸かり、人々が筏で移動している写真が今に伝わっています。当時の県の記録から、小野田市の浸水地域は、江戸時代以降の開作地とほぼ一致していることがわかります。

罹災後、小野田市へは人々が集まり、決壊した堤防の修復を行い、全国各地から衣類や寝具類の提供を受けました。そのおかげで罹災の 1 年後には、小野田市は復興しました。全国各地からの支援に対する感謝の意を忘れないために建てられたのが、シルバー人材センターの前にある「風水害救援感謝碑」です。市内で唯一、自然災害伝承碑の地図記号が使用されている場所です。

このような災害についても、私たちは忘れてはいけない「記憶」や「風景」として心に留めておくべきなのかもしれません。



水害時の様子 昭和 17 年（1942）
（中央図書館蔵）★30



30 日後の六十番 昭和 17 年（1942）
（中央図書館蔵）★31



風水害救援感謝碑
平成 26 年（2014）撮影 ★32

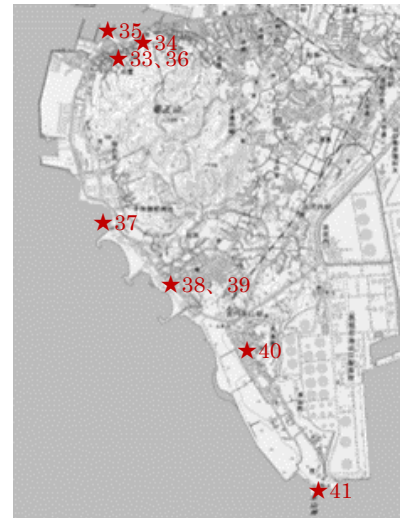


第5章 木戸刈屋から本山海岸

木戸刈屋は、竜王山の北西にあり、刈屋漁港からは山肌に立ち並ぶ家屋を見ることができます。

また、大浜や本山には、昭和初期以降に栄えた炭鉱の遺構があり、竜王山の山すそにある「ハマセンダン」の巨樹は見る者を圧倒します。

竜王山や焼野海岸から見る海や夕陽は美しく、整備された海岸を散歩しながら、遠く九州を臨む風景を楽しめます。



写真位置図

国土地理院地図

1. 昔ながらの町並みが残る木戸刈屋

木戸刈屋は、竜王山によって三方の風の影 響が 少ない天然の港で、漁村として比較 的に早くから開けていたようです。中世末期と思われる記録によると、「木戸刈屋浦に大勢の海賊が襲来し討伐した」との記載があり、この頃には漁村集落が形成していたと考えられます。

かつては、海と集落との距離が近く、港に足をおろすとそこには家々が並んでいました。

海岸沿いの道ができるまでは、竜王山の中腹に造られた「中道」が、刈屋の主要道路でした。この道は船木から刈屋の港を結ぶ往還道（3里23町、約14.3km）で「刈屋道」と呼ばれています。

道沿いの集落には、幅1mほどの石段が縦に走っており、その両側には、石垣を高く積み上げた狭い敷地に家が立ち並んでいます。山の中腹から眺めると、連なる家の屋根の向こうには海が広がり、漁村特有の風情が感じられます。



刈屋の風景 年未詳
(歴史民俗資料館蔵) ★33



刈屋道 令和6年(2024)撮影 ★34

刈屋漁港の波止先には、立派な常夜灯が残っています。この周辺の海の平穏を願い、文政元年(1818)に吉敷毛利家によって建てられました。

明治の終わり頃まで毎晩灯されて、木戸刈屋の位置を沖の船に伝えるとともに、港に出入りする船を静かに見守る灯台として役目を果たしていました。



常夜灯 令和6年(2024)撮影 ★35

コラム④



りゅうおうぐうりしゅうき

『龍王宮利生記』～木戸・刈屋の鎮守八大竜王宮～

ちんじゅはちだいりゅうおうぐう

八大竜王宮の旧社家である池田家に伝わった『池田家文書』(歴史民俗資料館寄託)の中に『龍王宮利生記』という史料があります。「利生」とは、「神仏が利益を与える」という意味で、木戸浦・刈屋浦の住人を中心に、八大竜王宮より与えられた「利生」について数多くの話がまとめられているものです。その中の一つの話を紹介し

てんぼう

天保9年(1838)10月6日と10日の夜に大風が吹き、漁人が多数被害にあい、船の破損や九死に一生を得ました。近隣の浦々は大きな被害を受けたが、木戸浦だけは一艘の被害もなく、人々の被害もなかった。これは、毎年10月16日に竜王宮の祭礼を賑やかにっており、竜王宮がそれに感応したのだと語られているということです。

おおかぜ

ふ

ひがい

はそん

きゅうし

いっしょう

え

きんりん

うらうら

いっそう

ひとびと

さいれい

にぎ

かんのう

この他にも海で遭難したが、八大竜王宮から光が照らされ、無事に帰ってこれたという話や、八大竜王宮へ奉納する太鼓を下関で購入した帰りに大漁だったという話などが記されています。

神仏に対する信仰の形は時代とともに変化してきました。『龍王宮利生記』は、私たちの祖先がいかに地域の寺社を大切にしていたのかを知る貴重な史料です。

2. 木戸刈屋盆唄^{ぼんうた}

「木戸と刈屋の境の松は、わしが植えたが育つやら」で始まる木戸刈屋盆唄は、萩藩^{はぎはん}の家老^{かろう}の姫^{ひめ}と足輕五郎^{あしがるごろう}の悲恋^{ひれん}を題材とし、唄^{うた}と舞い踊り^{まおど}がこの地に伝え継がれてきました（唄の由来は諸説あり）。つま先を斜め後ろに地面を軽く摺らし、左右両手を交互に上げて手首をひねる踊りの所作は優雅なものです。

昭和30年（1955）頃までは、盆の7日間踊られていましたが、現在は、木戸地区、刈屋地区のそれぞれの盆踊りの日に踊られています。



木戸刈屋盆唄踊 令和6年（2024）撮影
（個人提供）★36

3. 竜王山をとりまく海岸線^{せん}

竜王山の母岩である「緑色片岩^{りょくしよくへんがん}」は、焼野海岸の波打ち際^{なみ}でも見ることができます。これは、今から約3億年前（古生代^{こせいだい}）に堆積した石英鉱物の少ない火山噴出物が、約2億年前（トリアス紀^き）に、海洋プレートの沈み込み型造山運動によって高い圧力の変成作用を受け、塩基性の緑色片岩になったものです。



海岸線の緑色片岩 令和6年（2024）撮影 ★37

焼野海岸は竜王山のふもとに広がる海岸で、海水浴や潮干狩りができる海岸として市民に親しまれていました。

平成11年（1999）7月20日にオープンした「きららビーチ焼野」は、コースタル・コミュニティ・ゾーン（C.C.Z.）事業の一つとして、海水浴や磯生物の観察等ができる海浜ゾーンなどの整備だけでなく、高潮・浸食に対する防護のため突堤や緩傾斜護岸、人工リーフ、養浜などの海岸整備も行われました。現在も、海水浴やマリンスポーツなどが楽しめる憩いの場となっています。また、美しい夕陽を見ることができ、「日本の夕陽百選」に選ばれています。



焼野海岸 潮干狩り 平成 6 年（1994）頃
『小野田市焼野海岸 コースタル・コミュニティ・ゾーン
整備計画書より転載』★38



焼野海岸 平成 30 年（2018）撮影 ★38

4. かいいてい 海底につづく炭鉱

竜王山周辺には、大正以降に海底炭鉱の操業そうぎょうが始まり、昭和 10 年代以降、本山炭鉱や大浜炭鉱といった大規模な炭鉱が営業採炭えいぎょうさいたんしていました。大浜から本山岬への海岸沿いには炭鉱住宅が立ち並び、炭鉱で栄えた頃ころは急激きゅうげきに人口が増え、そのため、昭和 15 年（1940）に本山小学校を開校し、その年の 9 月には校舎こうしゃの増築ぞうちくが決定されるほどでした。採掘が盛んさいくつに行われていた当時、焼野海岸には石炭積み出しの栈橋さんぼしがあり「炭鉱のまち」ならではの風景がありました。

現在でも市内に炭鉱の遺構があり、その遺構の一つが「旧本山炭鉱斜坑坑口きゅうもとやまたんこうしゃこうこうぐち」です。坑口とは、その炭鉱に入るための入り口で、昭和 16 年（1941）に完成したとされ、昭和 38 年（1963）3 月にその坑口かんせいを閉鎖するまで使用されていました。



本山半島航空写真 昭和 36 年（1961）
（歴史民俗資料館蔵）★39



旧本山炭鉱斜坑坑口 平成 22 年（2010）撮影 ★40

終章 ゴールの先には^{さき}

「スマイルコースト・ウォーク」のゴール地点である焼野海岸の先、市の最南端の岬^{みさき}には、「くぐり岩^{いわ}」と呼ばれる奇岩^{きがん}があります。周防灘^{すおうなだ}に突出^{とっしゅつ}するように海に面したその「くぐり岩」は、緩やかに長い歳月^{さいげつ}をかけて風波などに侵食^{しんしょく}され、今もなお雄大な姿^{ゆうだい}を私^{わたし}たちに見せてくれます。



くぐり岩 昭和初期（シティセールス課提供）★41



くぐり岩 令和元年（2019）撮影
（シティセールス課提供）★41

※くぐり岩は干潮時^{かんちょうじ}にしか近寄^{ちかよ}ることはできません。

各章^{かくしょう}で見てきたように、市域^{しいき}の海岸沿い^ぞは、各地区^{とくゆう}に特有^{れきし}の歴史^{けいかん}や景観をもつことが分かりました。その中には自然にできた風景、人工的に作られた風景、そしてその両方^{ゆう}が融合^{ごう}している風景がありました。それらは過去^{かこ}の歴史とともに形作られてきたものであり、この先も時を重ね、その時代^{おう}に応じ、さまざまな変化^とを遂げていくでしょう。

このまちの歴史^{ひとびと}、人々の暮らし、まちに溶け込む文化財^{とこぶんかざい}を学び知^しることで、これまで気づけなかった新しい視点^{しってん}から情景^{じょうけい}を感じ取^とることができます。人それぞれの「情景」を生み出す文化財や景観を、私たちは守^{つた}り伝えながら次世代^{じせだい}へ受け継^ついでいくことも必要なことなのかもしれません。

先人^{せんじん}たちへの思い^はを馳^{さんよう}せながら、山陽小野田市^{おのだし}の海岸線を歩いてみませんか。

山陽小野田市へのアクセスマップ



山陽小野田市役所までの所要時間

- 🚗 自動車で 山陽自動車道 小野田 IC から 約 5 分
埴生 IC から 約 15 分
- ✈ 飛行機で 山口宇部空港から 車で約 30 分
- 🚋 電車で
山陽新幹線 厚狭駅下車
山陽本線 厚狭駅から新山口方面乗車 小野田駅まで約 6 分
新山口駅から下関方面乗車 小野田駅まで約 32 分
小野田駅から徒歩約 9 分

【主要参考文献】

小野田市歴史民俗資料館『小野田の銀座 柳町と有帆川』2000
 山陽小野田市教育委員会『ふるさと文化遺産』2015～
 小野田市教育委員会『ふるさと小野田』1972
 山陽小野田観光協会『まち再発見』2016
 御薮生翁甫『長門国厚狭郡梶浦開作築立始末』1966
 福田東亜他著『瀬戸内漁村の変貌と再生（明日の木戸・刈屋）』1986
 河本寅雄『ふるさと散策—小野田編』2007
 高橋政清編『ふるさとの思い出写真集 明治大正昭和—小野田』1979
 山口県『有帆川河川整備計画 彩流街道『有帆川』』年未詳
 『中央気象台秘密気象第6巻』（吉越昭久編『日本災害資料集 気象災害編第5巻』クレス出版 2013 所収）
 『山陽町史』1984、『小野田市史』1962、『小野田市史 補遺篇』1963
 『小野田市史 通史』1990、『小野田市史 民俗と文化財』1987
 『小野田市史 史料 上』1985、『小野田市史 史料 下』1988
 『山口県史 史料編 中世1』1996
 『防長風土注進案 第15巻 船木宰判』1961
 『小野田市報』、『山陽町報』、『山陽小野田市報』

【凡例】

本書において、「山陽小野田市歴史民俗資料館」は、「歴史民俗資料館」、「山陽小野田市立図書館中央図書館」は「中央図書館」、「山陽小野田市立図書館厚狭図書館」は「厚狭図書館」、「山陽小野田市民館」は「市民館」、「公益社団法人山陽小野田市シルバー人材センター」は「シルバー人材センター」、「山陽小野田市協創部シティセールス課」は「シティセールス課」、「山陽小野田市教育委員会社会教育課」は「社会教育課」と表記した。

コーストウォーク マップ

★: 本編にて紹介 ●: マップにて紹介 トイレ





有帆川大橋

目出駅

★23

★26

歴史民俗資料館

★27

★31

★24

文

★32
南中川駅

★30

★28

小野田線

南小野田駅

徳利窯

★25

小野田港駅

歴史民俗資料館

建物の外観は「徳利窯」をイメージして設計されています。

【休館日】

毎週月曜日（祝日の場合その翌平日も休館）、
祝日（但し土曜日が祝日の場合は開館し、月曜
日を除く翌平日が休館）、
年末年始（12/27～1/5）



有帆川大橋

平成26年に開通しました。橋の
途中にあるベンチに座り、景色
を楽しんでもいいですね。



山陽小野田市サッカー場★27

昭和38年に建設したサッカー場。
現在もサッカーを楽しむ多くの
人でにぎわっています。



徳利窯

明治16年に建造された最初の
セメント焼成用の堅窯の1つです。
道路からは煙突部分が見えます。



- ★23 野球場付近
- ★24 小野田市街地の様子
- ★25 小野田古開作の堤防跡「八丁土手」
- ★26 日産ダヴ
- ★27 山陽小野田市サッカー場
- ★28 山陽小野田市立サッカー交流公園
- ★29 塩浜石炭焚滓堆積地
- ★30 水害時の様子
- ★31 30日後の六十番
- ★32 風水害救援感謝碑

★29

文

500m

- ★33 刈屋の風景
- ★34 刈屋道
- ★35 常夜灯
- ★36 木戸刈屋盆唄踊
- ★37 海岸線の緑色片岩
- ★38 焼野海岸 潮干狩り
- ★39 本山半島航空写真
- ★40 旧本山炭鉱斜坑坑口
- ★41 くぐり岩

35
★
★34
33、36 ●刈屋の町並み

● 竜王山

● 竜王山のハマセンダン

文

浜河内駅

ゴール

文

本山線

★39

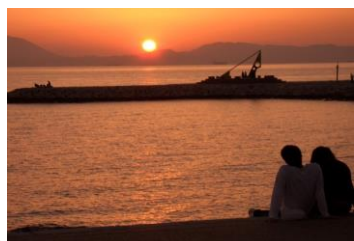
★38

長門本山駅

★40

焼野海岸(★38)

「日本の夕陽百選」に選ばれた名所で、海水浴などが楽しめます。



くぐり岩(★41)

長い歳月をかけ形成された奇岩。干潮時にしか近寄れません。



500m

※くぐり岩、焼野海岸、竜王山の写真はシティセールス課提供。41
※ハマセンダンの写真は個人提供。

刈屋の町並み

漁港と道路を挟んですぐの山肌に民家が立ち並んでいます。



竜王山のハマセンダン

目通り5.2m、根回り約12m、樹高約15mで国内最大級です。



竜王山

標高135.69mの竜王山は、春には1万本の桜、初夏にはヒメボタル、秋にはアサギマダラが飛来し、四季を通じて貴重な山野草を見ることができます。また、「新日本の夜景100選」や「日本夜景遺産」にも選ばれています。

